

北面台地の原風景

焼山北面台地(202/3/10-11)

L : I 崎、H 口

山スキーのキャリアがまだ浅い僕にとって山の会の先達たちと行く所行く所が新鮮である。今回は I 崎さんが二泊三日で焼山北面台地へ行こうと誘ってくれた。北面大地にテントを張って火打山、焼山を滑る計画だ。『北面台地』という響きが何とも心を引き付ける。

結構な降雪により日本海側へ回り込むのに六日町まで大回りすることにしたため、笹倉温泉に着いたのは計画より 1 時間半遅れとなってしまった。しかし一方でこの降雪のおかげで駐車場からスキーを担いで歩くことなく、シールを付けて歩くことができるのは幸いである。

11:25 出発。堰堤を折り返して高度を上げていく。ふかふかの雪の上に先行者のトレースは無い。

「駐車場にいかにも山屋らしい車が 2 台あったけどこっちに来てないんだな。」

曲がりくねった林道に沿って歩を進めて行く。

「上から滑って来た跡があれば適当に森の中をショートカットしてくんだけどさあ、こんなに雪が多いと林道歩いて行った方が早いだろう。」

テントと食料を背負って当然荷物は重たい。降りたての雪のラッセルが続く。

「このままラッセルが続くなら北面台地まで行かないでアマナ平辺りでテントでもいいかもな。」

つづら折りの林道を 1 時間ほど歩いて行くと右手に下界の景色が広がった。

「あそこに見えるのが笹倉温泉だな。」

「もうこんなに来たんですね。」

「ははは…、笹倉温泉が見えてるんじゃないまだだよ。」

歩き始めて 2 時間半、分岐を二つ越えてさらに進んだ所で I 崎さんが振り返った。

「あのさあ、何かそこ、すごく平らに見えるんだけどさあ、目の錯覚かなあ。」

周りが真っ白なので分かりにくいですが、確かにそこは平らな雪面に見えた。940m 付近の道が折れ曲がった所だった。

「もう 14 時だからさあ、ここでいいんじゃないか。」

何かここがすごくいい場所に思えた。ザックを下ろしスコープを取り出し、整地して 1 時間ほどでテントを建てて中に入るとさっそく缶ビールを取り出した。



だらだらと飲みながら時間は過ぎていく。18 時半を回ったところで夕食タイムに切り替わる。I 崎さんが用意してくれたのは焼肉であった。テントを担いでの長時間歩行のため精がつくものにしてくれたのだろう。

風も無く静かなテントの中で酒はさらに進む。持ってきた荷物が徐々に軽くなっていく。

5時に起床、まずはお湯を沸かす。朝食を済ませテントの外に出て準備をしていると4人組が上がって来た。年はI崎さんと同じくらいか。僕らのテントを見て「エスペース使ってるなんて山岳会の方？」と聞いてきた。向こうは十日町の山岳会で焼山を頂上まで行かず大岩で引き返して戻ってくるらしい。

「山スキーは楽しいよね」と言って発って行った。

そのすぐ後、50代の単独行が通りかかった。話しをすると我が会の代表と山で会ったことがあると言う。彼はウマさんと名乗っていた。

さて、我々も7:20出発。晴れて無風。申し分の無い天気、前方の山が光っている。

間もなくアマナ平、確かにここならどこでもテントが張れる。正面の真っ白な山が高松山で奥に噴煙を上げる焼山が見えてきた。

先に行った彼らのトレースが二手に分かれていた。4人組は小高い丘を左手から巻くように上っている。一方、ウマさんは右から樹林帯の急な斜面を角ばったSの字で上っていた。

我々はなだらかな左を選んだ。左には形の良い放山の山塊が見えていた。回り込んで雪面を上がり切ると下りの斜面が出てきた。

「そうか、ここ帰りはシール付けないと上がれないから右の方に行かないと滑って帰れないんだな。」

ウマさんは帰りのルートがわかりやすいように右手の斜面を上って行ったのだ。

9:00、北面台地に出た。ひときわ広大な雪面が広がっていた。右には真っ白にテカった高松山、正面には何本もの太い溝を刻んだ焼山、左手には険しく尾根を広げた山らしい山である火打山。

「すごいだらう。これぞ日本の原風景って感じだらう。この景色をまだ見てない人に見せてやりたかったんだよ。」

テン場から1時間半ちょっと。と言うことは、昨日10時に歩き始められていれば計画通り北面台地まで来れていたのだ。朝、テントを出て目の前がこんな景色に囲まれていたらそりゃあ感動だらう。



一本取っていると、緑色の服を着た単独行が通って行った。さらにカメラを抱えた単独行。どちらも若かったが単独で来るスキーヤーが意外というもんだ。

北面台地の途中で焼山へ向かうルートと火打山に向かうルートが分かれる。まっすぐ伸びる焼山へのルートの先ではウマさんが4人組と合流したようだ。一方、火打山に向かってカメラの単独行がトレースを作っていた。

今日は火打山を目指そうと出発したのだが、取り付く尾根がI崎さんの記憶以上に険しそうに見えたことや下方部に雪崩れた跡が見えることから止め、焼山へ向かうことにした。

焼山がだんだん大きくなっていく。ひときわ太く刻まれた溝の右側の斜面を上って行くと雪面から首を出した麒麟のような枯れ木があった。近くには牡鹿が上を向いたような枯れ木もある。

「この辺が大曲だな。」

先行者たちは右の溝を越えてさらに上部へと向かっていった。
「焼山もさあ、上まで行くとカリカリだろうからさあ、上まで行かないで適当に斜面の途中から滑っておかわりすることにしようか。」
賛成であった。一応、上部に見えている木を目標とすることにした。

11:00、高度 1,680m まで上がった所でシールをはがし滑降モードに切り替える。
「傾斜が緩くなる所まで滑ろう。先行っていいよ。」
誰も滑っていない真っ白な広い雪面。さて、どう滑ろうかな。正面の放山に向かって滑り出す。少し湿り気があるので細かいターンには向かないが浮遊感のある滑りができた。途中で止まって I 崎さんが来るのを待った。すると滑って来るなり
「いやいやいや、八甲田のパウダーを味わってきた俺にはちょっと重いな」と笑う。

大曲まで下りて止まっていると、上から緑の単独行が下りてきた。
「向こうの尾根まで行ったら風が強いんで上まで行くの止めて戻って来た」と言った。火打山の稜線には雪煙が見えていたが、西からの風が強いらしい。高松山に遮られているおかげでこの辺りはほぼ風が気にならなかったが。
緑の彼はあまり滑りを楽しむつもりはないのかシュプールを描かず電車のレールのような跡を残してまっすぐ下りて行った。

320m 下った所で再びシールを付けて折り返すことにした。先ほどのトレースを辿って行くが上がるにつれて少しずつ風が出てきた。トレースの溝が右側からほろほろ崩されている。焼山の頂上付近でも雪煙が目立ってきた。上の方へ向かった彼らも滑り降りて来た。

上がっている途中、「もう腿がパンパンだな」と言うので途中で止めて滑り出すかと思っただが、キリンや牡鹿を越えてきっちり先ほど滑り出した所まで上り返した。

シュプールの跡は増えたが何せ広い雪面だ。シュプールにかからないような所を選んでコース取りをする。放山の後方には青空と海が青く混じっていた。青と白しか色の無い景色。放山に向かって I 崎さんが小さくなって行く。



帰路、先行した彼らのトレースが左方向に向かって付いているのを辿った。ウマさんが上がった斜面は木を避けながら下る。

途中で I 崎さんが立ち止まって位置確認をした。
「このままショートカットのルート行っちゃうと俺らのテント過ぎちゃうからな。」
僕もそれが心配だった。他のみなさんはただ下ればいだけなのだから。

テン場に戻って来たのはまだ 13:20。悩ましい時間だ。
「さて、どうするか。」
明日は天気が悪くなることはわかっていた。悪天候の中で撤収するのもイヤなので思い切って下山することにした。

14:20、下山開始。担ぎ直す荷物は重い。腿にも来ている。
「無理してショートカットなどしないで林道の通りに滑って行こう。」

そう言ってはいたがしばらくすると I 崎さん、つづら折りの林道をショートカットするようになった。ちょっと間が開いて見えなくなったので、またショートカットで早く下りてるのかなと僕もショートカットしながら下りて行った。

堰堤を折り返して橋の近くまで下りたのは 14:45。除雪車が道路の雪をすっかり除いていた。I 崎さんの姿が無かったのでそこで待つことにした。しかし 15 分待っても来ない。電話をしてみたが出ない。心配になりザックを置き、シールを付けて探しに行くことにした。

堰堤を折り返した高台の所に I 崎さんのザックが置いてあった。I 崎さんも僕を探しに上り返していたのだ。安心した。

声を出し笛を吹きながら上っていくと、I 崎さんが滑り下りてきた。途中で板が外れたそうで、その間に違うルート取りで通り過ぎてしまったようだ。

除雪車が出ていたのは落石の処理に作業車を出すことになったためらしい。
「3月上旬で落石とはそうとう雪が少ないんだな。」

平日昼間の笹倉温泉は空いていてのんびりと温泉に浸かることができた。ゆっくりと温泉から上がっても 16 時過ぎ。十分帰れる時間なので帰ることにした。

日本海沿いを走って直江津から十日町への国道に入った所で陽が落ちていった。十日町には我が会の代表お勧めのラーメン屋があるそう。この遠征のメのラーメンをやっていくことにした。

(H口 記)

